



西垣文庫
文庫10
7282



特 文庫10
7282



寄笑新聞第一号

金貨大評議

東京

○金貨大評議

橋爪錦造編集

あるまじく
一新開町み搦社と書一札を出せ家あてて内
あの年のあろ三十七八より五十四五の男三銘評議
區々ある中み惣助と呼るもの座中み向ひ貸すと
り字々代貝と書く貝の物成搦き奇せヒるみ置
きこ以て浮立の金銀を搦ヒふの心より搦ヒ社と
号づけ此家を會社と做せしより初日と歩集へど

僕ふ初は如き

梅亭泥夫

製玉あり

母は中の穴成培り

月六冊づ

榎木の板中彫る

穿らしてて丸

きん敷きを

食するも

たぐの色



5753

西文庫

貸出の規則極ら秘を持明ずと耳き吝藏と云ふ
りの膝を進め然とむ貪次郎さんとも相談と云ふ
借り方ちあらく技猾めく昨日小生方へやー込んで
きんつこのかめいと書入れあて貸せとのと由名家
作なう宜いが家名へ出入れ成らぬと断つた
さきの者の言ふあの家名で西大の茶の瓶の水瓶あ
耳の垂と班の大犬を連れて来と茶の瓶の水瓶あ
はぶと一ともの尻尾の生と西大の憫れて仕舞ま
たと吐す側うう貪次郎其處で小生の監えある極

安利あて年一割の三十兩一分小貸附十三年の長年
賦取上とら人が喜んむ借りませう尤前利由急十
兩貸せむ十三年の利十三圓と成ると以て此方うら
貸す金へ三四足させて直ふ知れさせれを身代限り
ぶ出逢ひても三兩の徳去の貸方が大丈夫と思ひ
まると耳て慾助點頭あがういやす小生も其の仕法
ふ気が附き貸さうと思つて觸あとか今以て
人も借りふ来あいの不思議さと云ふ吝藏か
かんがえ世の中が不景氣どう其規則の食付

まにまの丹一て前利をみるの御法度持とよりり
利を五両一分とて三日縛りと定め月ふ十度の
倍利と一外ふ一割の禮金を取ると為る是はぐら
十三年賦の割より悪いが其位は緩めずは借人が
難儀のしませう貪次郎云ふ三日の倍利で餘り
お安の手前どもの隣家の藤間での潮晩の踊り
で一日も休まぬといふことと話せば吝嗇夫を
振り附の藤間で有付いませう貪次郎さう云ふ
ありつけと貸しつけといふ一規則が違ひました

惣助云ふ借主の一町内を残らず請入ふさせ戸長町
用掛りの興印と云ふところを此人達の御用多だ
から其代りふ産神の神主と且那寺の和尚とふ
両印を致させませうと耳き吝嗇小首成頃何さ
ま神主との宜い思ひ附どが和尚へ悪さうなる何
故あゝ神主を拂ひぬ人拂ひたぬ人と拵むが和
尚は生者必滅會者定離など悟りぬらうと云ふ
云ふあちと不安心さす惣助手を拍ち宜い
ん附き而るんと證人より書入れが肝心といふ

カ

三

之の株式を潰れがけり家作ハ火事で焼るう
 引当ハ地面に限ると言き貪次郎まて頭を振り
 否近江の湖水や富士の山を一夜ハ出来と云
 ふ噓引當不取と地面が龍宮へ所替えと云
 胎内の息出穴もあらず物あり取つ返
 ハ附ません何程監えても金を向うへ渡さず利
 を取る工夫でせけれを面白く無いと云ハ吝
 溜息つき世の中の融通貪乏人助けのため所同
 前ハ私心痛りすハ國への奉公天朝への御恩報と

存下まればはもと元金と御さるい利の多きと工夫の
 多しあの時々當惑いたしますと相談と云なる折
 かし孫子の障子破り入り来るものハ社中
 の算兵衛あき各方の結ハ次の回みて遂一承知い
 たりと云小生の思ひ入るといハ大きハ遠く実ハ皆さん
 のお説の通り貸借を天下の融通貸す者ハ借りと
 者う利をえらと今日活業と為し借と云もの
 借りと金元手あて利をせりとも割不當る根
 不儲る用の間を欠ぬ何れも無て悔ぬを令



○ 高利

氷あり
是を渡らんと

まきをかき

利足の区あり

足を取らるるを倒る

取るものいすべりあり

予者い倒るる

刀子

五

貸^かだ^が金^{かね}を^を貸^かふ^の元^{もと}金^{かね}や^り利^り足^その上^のり^き残^あ苦^くみ^疾ま
 あ^いの^ぞ借^かり^とら^ぬの^身代^{しろ}が^宜く^ある^やう^み氣^と操^め
 む^か方^が宜^いと^らぬ^まに^所を^世の^中の^金貸^か残^ある^る
 み^書入^いと^物を^勿論^{ろん}娘^{むすめ}を^賣せ^やう^と身^{しろ}代^{しろ}限^りみ
 為^させ^根と^らる^その^さ人^と取^とを^宜い^とら^ぬる^元
 よ^う夫^であ^けね^を家^げ業^あの^ぬ根^をめ^のだ^が
 小^こ生^うの^監げ^へる^左様^{さむら}で^あの^貸の^残活^{かつ}業^あを^為り^やア
 借^かり^のお^得意^とだ^う何^ど處^こま^でも^大切^{せつ}ふ^して^先え^の
 事^{こと}情^{じやう}を^篤と^支正^し見^ま当^あが^附と^滞り^ふ関^{かん}係^{けい}

ら^ず貸^かさ^う人^も亦^{また}貸^かし^物を^取立^たし^夫と^と
 一^い息^{いき}と^らぬ^とら^ぬで^押倒^おす^事が^ある^其
 代^かり^の貸^かさ^う者^{もの}と^貸る^その^の差^さ別^{べつ}と^言ふ^則ち
 是^{これ}と^懐中^{なつか}か^ら出^です^書附^ぞを^三人^りの^請取^とり^関係^{けい}
 見^みる^ふ
 一^い何^{なん}も^限ら^ず賭^か事^じと^好む^者も^ある
 一^い持^も女^にの^唱妓^か賣^いする^人も^ある
 一^い祭^{まつり}禮^{れい}開^{かい}帳^{ちやう}の^出迎^{むか}ひ^等も^ある^金を
 一^い飲^のみ^止り^せぬ^酒を^飲た^がる^人も^ある
 貸^かさ^ず 貸^かさ^ず 貸^かさ^ず 貸^かさ^ず

一家業を疎み遊山抱奥を好む者あり 貸さず
 劇場寄縁日歩行して尻の居らぬものあり貸さず
 一 朝寐霄ツ張み買食とあそぶ者あり 貸さず
 斯の如き癖あるものみ金を貸せむを益ある雑費の
 助けと成り一度二度を約束通り返して由
 公裁を仰ぐ等ふいたるに多かるべし假令滞り
 返令為るとも道理ふ背くと以て除く
 一 君小忠實親み孝行あるを 貸す
 一 正直ありて今日を守るものあり 貸す

難ふ蒞まき恐るに義ふ背りざる者あり 貸す
 一 出精して怠らず稼ぐ者あり 貸す
 一 病煩ひ災難とうと受け明日の身の事も分ち
 かくた者あり前條の行ひ有る請人と得て貸す
 但し是等の入るに憐むべしたみく請人と侍
 ず貸すの理あるども諺の元金成以て自
 己の活計を立を助け救ふ由あり依て
 暫時是を忍ぶ
 前條の人々不運あり貧乏神の具負を受け

借錢の淵に沈むとありとも時未だ身を立家と
起すの浮瀬へ乗り出すと必定の理なきを貸附の
金錢の度を失ひ返すことを得ざるも催促せざ
能く事情を正し貸したる上も猶足して貸すべ
し心長く彼命をとり外り有るべ
らば我が金をそと彼が力に助け身を立て家を
起させざるを夫を必への勤め天朝への御恩報
トなきといふも可あらん我が輩の如き金貸して
在る高利貸と卑む高利の則氷あり解安く推け

安く滑濶安く以て其活業の危ふれを知るべし
亦金を貸して得るところの物に利足といひ畧し
て足と呼ぶ足を取り強く引を倒れざる者なり
爰を以て高利貸借する人々の皆倒れ潰るなり
金貸し高利ふ困りて世と渡るも我濶らざる
とありて所得と為るも人破例さば我破を助け彼
のたぬ我助りてこそ真の金貸世間の融通と
いふべし書入れぬるの家藏地面不在らず
借り主の心不在り請人の産神の神職且那寺の

切号

和尙を恃まば借り主の腕と脚との稼み任せん
 と云ふ然れど借り主の方ふ如何ある議論の有る
 此書の次篇を待ちおの説を問ひ一上當社の規則
 極んと言を皆算兵衛が理解み服し借人の議
 論を待とうけり

寄笑新聞第一号 終

東京本石町四丁目	岩本忠藏
同京橋彌左工門町	大島屋傳右工門
横濱弁天通四丁目	中屋銀次郎
上州高寄田町三丁目	柴田源作
信州上田原町三丁目	田中長右工門
同長野吉田村	長田忠之助
武州熊谷本町三丁目	和田貞節
東京照降町	恵比壽屋庄七
本局	寄笑社

表
録

本草綱目

卷之